

本年6月、欧州を訪れた。時期を同じくして、フランスでは世界最大級のスタートアップの祭典「VIVA TECH」が開催されていた。

日本政府が、官民を挙げてのスタートアップ支援強化に乗り出していることは読者もご存知だろう。この折、VIVA TECHを視察した筆者が驚嘆したのは、日本のそれとはまったく異なるフランスのスタートアップ支援の環境である。まず、VIVA TECH自体が、言葉にしたように「祭」である。開催日前日から関係者が集うパーティ

フランスのスタートアップ祭典に驚く

連のスタートアップが自社製品を大音量のBGMを背にアピールしているかと思えば、主催者でもあるLVMHのブースでは、ティファニー（ラグジュアリージュエリー）など名だたるメゾンが、各社のアイコン製品、作品と新たな技術をかけあわせた「観て楽しむコーナー」を設けていた。そこに集う観客らは、さすがにドレスアップとまではいかないものの、スタイリッシュな、そしておそらくは高価なスーツに身を包み、筆者は明らかに場違いだった。出展メゾンは各社の商品を示すだけでなく、自社が支援するスタートアップとコラボレーションした技術を同社製品に乗せて「魅せる」ことにも徹底していた。LVMHが支

援するスタートアップたちもSDGsに関連した技術を発表し、LVMHがサステナブル企業群からなることを観客に「見せて」いる。日本国内でもスタートアップ・ピッチ開催は増えていくが、明らかにVIVA TECHとは趣が異なる。VIVA TECHはさまざまな国から、ひとくりにできない幅の年齢層が集い、タンクトップにジーンズ姿の人もいれば上述

のようなドレッシーなスーツ姿の人も集う場だった。筆者は明らかに、VIVA TECHの雰囲気そのものに圧倒された。

帰国後、フランスに留学経験がある知人にそのことを話したところ、彼は「モンマルトルの丘のようだ」とつぶやいた。モンマルトルの丘は、今も多くの観光客が訪れる名所である。この丘が知られるのは、ルノワールやピカソ、マティスら著名人がアトリエを構え、カフェを楽しんだ場所だからだ。その雰囲気は憧れて渡仏した外国人画家も多く、「芸術の都パリ」を象徴する場だ。そう考えると、確かにVIVA TECHに集まる多くの参加者は、LVMHのような高級メゾンも参加するフランスのスタートアップ支援の魅力にひきつけられて、集ったのかもしれない。

名古屋では翌秋、日本最大のスタートアップ支援拠点Station Aiが開業する。これも知られたことだが、Station Aiはフランスのインキュベーション施設にならったものだ。支援のあり方を手本にすることはもちろんだが、日本、愛知、名古屋ならではの魅力が存分に醸し出される場となり、それに惹きつけられたスタートアップが楽しむ場になって欲しい。起業そのものには苦しみも伴うが、やはり興奮、楽しみも伴ってほしい。そのようなことを帰国後もつらつら考えている。

支援の「箱」 にも魅力

ーがパリの至るところで開催され、開催会場は色とりどりのポスター、映像で構成されていた。モビリティ関



名城大学
経済学部准教授
太田 志乃

おわた・しの 中小企業論、産業論、産業集積論。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程修了。

